

多文化共生事業事例集		年度
		R7
団体名	公益財団法人 滋賀県国際協会	助成金名：多文化共生のまちづくり促進事業 事業費総額：1,105千円
事業名	グローバル＆多文化共生マインドを地域に広げよう！ーオリジナル教材の制作にむけた素材集めー	
概要	関係団体やセミナー修了生らと協働し、多文化共生マインドを育むオリジナル教材の制作に取り組み、その素材集めを兼ねたフィールドワークを通じて、若い人材の育成・発掘を図りつつ、これまでの学びを地域社会へ広げていく。	
事業のポイント		事業の詳細
●グローバルな視点や多文化共生のマインドを育むためのオリジナル教材づくりに地域で取り組んだ。 ●多文化にふれるフィールドワークには、現役高校生や大学生等が参加しやすくなるよう単発の参加を認めた。 ●過去3年間実施した次世代人材育成事業の修了生や国際教育研究会 Glocal net Shigaメンバー等が外国人住民はじめ多様な人々と連携し、様々な視点を取り入れながらオリジナル教材作成のための素材集めや教材づくり交流会を実施した。		1. 教材づくり検討会 ●内容 試作教材案の検討／ワークショップのデモンストレーション／フィールドワークや教材づくり交流会の進捗状況の共有／ふりかえり等 ●参加者数：延べ99人（計8回） 2. 多文化にふれるフィールドワーク ●内容 《Facebook 投稿へのリンク》 ・事前研修（オリエンテーション） ・第1回 ブラジル学校の生徒との出会い 《 https://x.gd/Ks7894 》 ・第2回 ムスリム（イスラム教徒）との出会い 《 https://x.gd/B6GFI 》 ・第3回 日本に根付く朝鮮半島の歴史と今との出会い 《 https://x.gd/aAw0G 》 ●参加者数 ・受講生22名 県内の高校生7人、大学生4人および教員を含む社会人（中には、海外留学経験者、外国にルーツを持つ高校生、留学生を含む） ・サポーター9名 県国際交流員、JICA滋賀デスク、外国人住民支援団体、市母語支援員、次世代人材育成セミナー修了生等
事業の背景・目的		
●県内外国人口は年々増加の一途で、これまで南米出身者が大多数であった傾向から変化し、東南アジアにルーツを持つ人々を中心とする新規流入者が急増し、地域の多国籍化・多文化化が著しい状況にある。 ●地域や学校では無理解や偏見によるトラブルが発生しており、互いの文化を認め合い受け入れる姿勢が強く求められている。しかし、現場では実践事例やノウハウが不足しているため、地域に根差し活用しやすい教材や実践例が必要とされている。 ●そこで、Glocal net Shigaメンバーや過去のセミナー修了生、外国人住民支援団体などと協働し、多文化共生マインドを育む新教材の制作に取り組むこととした。		 
3. 教材づくり交流会		
●内容（参加者数）《Facebook 投稿へのリンク》 ・第1回 モノがたりワークショップ（22名） 「物語の数だけ、いろんなニッポンの姿がある～モノがたりワークショップ」 https://www.s-i-a.or.jp/references/982 《 https://x.gd/QjwNH 》 ・第2回 調理実習＆インタビュー大会（23名） 教材「わたし家の食事から カードゲーム版」の増補版を作成 《 https://x.gd/PzALQ 》 ・第3回 ゴミ分別ワークショップ（21名） 「ゴミを分別してみようワーク『これって、どうやって捨てるの？』」 《 https://x.gd/923Wi 》		 
4. 事業報告		
・今年度事業の様子を、当協会ウェブサイトやFacebookに掲載 ・国際教育事業報告書の中でも報告し、参加者へ送付 《参照》国際教育事業報告書内（31-37P） https://www.s-i-a.or.jp/references/1008		 
R7年度	オリジナル教材づくりのための素材集め	
R8年度	試作教材デモンストレーション・改良	
R9年度	オリジナル教材完成、普及活動	

事業実施における工夫点・事業の成果等

●成果

- ・多様な人たちが集うことで、多角的な視点を教材づくりに生かすことができた。
- ・「多文化にふれるフィールドワーク」を開催したことで、新たな若い人材を取り込むことができた。

●各行事の規模設定

- ・「多文化にふれるフィールドワーク」では、主体的に行動できる次世代人材の育成を主目的とし、また、訪問先の受入可能人数（ブラジル学校や小規模な朝鮮初級学校等の訪問先への配慮、モスクの昼食提供、歴史館の会議室の収容定員等）、参加者以外の海外にルーツをもつサポーターや事務局の同行人数も考慮し、計画当初から15～20人程度の参加者を想定した。
- ・特に、試作教材のデモを行う「教材づくり交流会」は当初の見込みを超え、サポーター等を招き毎回20人以上の参加で盛況となった。

●過去修了生への実践の場の提供、活動支援

- ・フィールドワーク第1回、第2回の一部で、過去修了生2人がファシリテーターを務めた。
- ・過去修了生やフィールドワーク参加者の中から、新たに国際教育研究会 Glocal net Shigaの活動に参加するものが出てきた。
- ・「国際教育教材体験フェア in 滋賀 2025」（主催：当協会、共催：JICA関西）の分科会で、過去修了生2人が国際教育研究会メンバーとともにファシリテーターを務めた。

《 <https://www.s-i-a.or.jp/events/963> 》

●今年度「多文化にふれるフィールドワーク」受講生への満足度アンケート結果

〔第1回〕4.5 〔第2回〕4.7 〔第3回〕4.7

※参加者の満足度アンケート結果（低1－5高の5段階評価）の回答平均値（四捨五入）



今後の課題・将来に向けての展望等

●多文化にふれるフィールドワークの受講生は、訪問したブラジル学校で、将来は日本以外で暮らしたいと口にする生徒が多数いたことや、ムスリムの方たちが日本での生活を楽しみつつも不便さを感じていること、渡来人歴史館で戦前戦後の日本と朝鮮半島の人々との間にあった歴史的事実を学校では習ってこなかったことなどに、少なからずショックを受けていた。多様な人々との出会いを通じて、新たな知識の獲得や多様性への対応力が強化できたと同時に、自らの身近な人たちがこうしたことに関心が薄く、知り得ていない状況を課題と捉えていた。

●教材づくり交流会では試作教材の体験をする中で、様々な文化背景や経験を持つ人たちがじっくりと意見を交わし、共に学び合ったことで、人それぞれの多角的な視点や受け止め方があることを理解できたので、ワークショップを通じて体験的に学ぶことの有効性・重要性を実感することができた。

●今回の事業には、現役の高校生や大学生などの参加も多く、次代を担う若い人材とつながる機会となったが、実際のところ、進学や就職など環境の変化により、こうしたプロジェクトへの継続的な参加が難しいことが課題である。そのため、メーリングリストを通じて、定期的に情報の発信や、継続して行っている教材づくり検討会や試作教材のデモンストレーションなどへの参加を呼び掛けるように努めている。若者たちが活動に参画したいと思ったときに、いつでも自由に参加できるよう場を整えつつ、活動を続けていきたい。

●こうした学びを多くの人たちへも広げることを目的に、試作教材のブラッシュアップにさらに取り組み、学びの輪を広げることを目指していきたい。できれば、過去の修了生たちが地域住民を対象とした研修等でファシリテーターとして活躍してもらえることを期待している。

事業担当者の振り返り

過去3年間実施した次世代人材育成事業を契機に、県内のブラジル学校や朝鮮学校、モスクなどの関係者と連絡を密に取る間柄となり、同じ地域住民として、日頃なかなか知り合うことや接点を持つことも難しい中、若者たちが各所を訪問し、直接会話を交わすことで新たな発見をしていく姿をみて、訪問する側・受け入れる側双方にとって大変貴重な機会になったと実感することができた。ただ、次年度からはこれまでの学びを土台とした「教材づくり」に事業の軸を置く予定としているため、フィールドワークは今年度が最後になることを各受入先に伝えたと、大変残念がられながらも、今後も何かあればいつでも協力すると好意的に受け止めてくださったことをうれしく思った。

若い世代は感受性が豊かで、ブラジル学校の生徒たちとはすぐに意気投合していたり、少し緊張した面持ちで足を踏み入れたモスクでは、インドネシアの人々の温かい笑顔に迎えられ、ムスリムに対するネガティブな先入観を排して、みな同じ人同士として捉えることができるようになっていた。また、日本と朝鮮半島の歴史やルーツを持つ子どもたちが生き生きと民族的アイデンティティを育んでいる姿に触れ、自分たちが見聞きする情報の真偽や認識の甘さに反省しつつ、もっと知る必要があると意欲を高めてくれる若者たちがいた。

こうした経験を積んだ人材が、今度は地域の人々に多文化共生の社会づくりに求められる知識や意識を根付かせていくための活動に参画してもらえるよう、まずは国際教育研究会のメンバーらとともに教材づくりにしっかりと取り組みたいと思う。特に、地域で起こるトラブルの原因としてよく挙げられる「ゴミ分別」をテーマにしたものや、「移住するなら、どんな国がよいか」という視点から、今後海外からの移住者を受入れることについて、地域の人たち同士が対話する機会を設けていきたいと考えている。

